「もとはこちら」のお話し

№39　今月のテーマ　死ぬのが怖いという事は

2010 年（平成 22 年）3 月 20 日（土）

新版　「もとはこちら」

平成 21 年 1 月
（有）オフィス・コカワ印刷・発行

今日あるのは　きのうあってのこと
　　明日あるのは　今日あってのごとく
今世あるのは　前世あってのこと
　　来世あるのは　今世あってのこと
生死は昼夜覚眠のごとく　一如なり

されど　三世を超越して
　　不生不滅なるが真我なり
生きて楽し　死して楽し
　ああ　楽しい無碍三味　　けんじ

北原ゆり筆

甘党でならす夫婦ふたり、結婚記念日の夜、仲良くお祝いのケーキを囲んでいました。日中の慌（あわただ）しさも遠のき、少し遅い夕食を済ませたこのひと時が、一日の中で一番ほっとできる楽しい時間です。

結婚して間もなく独立し、時流の波に乗る予定が艱難辛苦（かんなんしんく）の波にもまれ、歯を食いしばり互いに手を取り合っての二十数余年、その荒波を乗り越えてきた二人です。

共にしてきた苦労の一つひとつが、夫婦をより強く結びつける結果となりました。二人は夫婦であると同時に、人生の荒波に立ち向かう同士でもあります。

百年に一度といわれる昨今の不況の中にあっても、忙しい忙しいと毎日楽しく頑張っています。

ケーキを食べながら、過ぎ去ったあれこれを語り合っているうちに、話はいつしか、つい先日見送った親しい友人の事になりました。

また、いつもお世話になっているある方も、今三度目の入院中で、決して楽観できる状態ではないという事です。

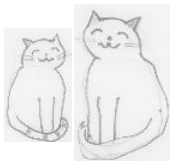
いやでも人の死という事を強く感じずにはおれない二人は、いつとはなしに、これから迎える自分達の死という事について話し始めました。

そして、これはある程度年を取った夫婦なら多分どこでもする話ではないかと思うのですが、どちらが先に逝くだろうかという話になりました。

夫は、自分がいなくなった後の妻の事を心配し、妻はまた妻で夫を思いやり、夫々に、出来ることなら自分が後にのこる方が良いなどと話し合ったようです。

そしてなお、「できれば一緒に死ねたら一番いいね」「いや、・・・やっぱり自分が残る」等と、ラチも無い事を語り合ったそうです。

何はともあれ仲の良いご夫婦で、めでたし、めでたし、です。しかし実はこの奥さん、「昔はそれ程でもなかったのに、年を取るほどに生への執着が増し、死ぬのがとても怖いと感じるようになった」というのです。



想像を超える自分の死

よほどの大悟徹底をしたほんの僅かな人か、或いは、ちょっとどこかに問題がある人以外は、多分彼女に限らず、誰でも死ぬのは怖いだろうと思います。

しかし私達人間が生まれながらにして持っている本能的な恐怖は、二つだけだといわれています。高い所と耳をつんざく程の、ものすごく大きな音です。それ以外の恐怖はすべて、生まれた後に自分の脳が創りあげた後天的な恐怖です。ですから死に対する恐怖というのは、生まれ付いての本能的なものではないのです。

人間だけが将来の死を意識し想像し、そして死に対する恐怖心をもっています。私達は他人の死は体験しても、「自分自身が死ぬ、死んで自分が完全に無くなる」という事は、絶対に体験できません。また想像しようとしても、厳密には自分の死を想像する事はできません。なぜならそこには「想像している自分というもの」が厳然として存在しているからです。

理性や知性、感性を総動員しても分からない自分の死というものを、それでもいつかは必ず体験しなければならないという不安や恐れが、私達には先ず第一番目にあるのです。「自分の死」は確かにいかなる想像の範囲をも超えております。

それともう一つ、他人の死に行く様を見て、それが安らかな大往生の姿ならまだしも、万一激しい痛みや苦しみの姿を目（ま）の当たりにしたりすれば、尚更死への恐怖はつのります。しかしこれはある医学者から聞いた話で、当然のことながら自分で体験したわけではないのですが、実はその時点では既に、本人にはもう苦しみはないという事です。

それは例えば、体にピッタリの服を脱ぐ時には、体をくねらせたり、手足をばたつかせたりするその姿が、傍目にはもがいているように見えるかもしれませんが、魂から肉体を脱ぐその死の瞬間には、当人には、もはや苦しみはないという事のようです。

その事はともかくとして、今が幸せならば尚更、この幸せから離れる事への不安もあるでしょうし、また死んだ後に遺して行く大切な人達への強い思い等もあるはずです。

そういう諸々の事からも、出来ることなら死にたくないと思うのは、誰にとってもごく自然な、あたりまえの感情だと思います。とにかく一旦生まれたからには、たとえ一分一秒でも元気で長生きしたいと願うのは、私達人間だけでなく、すべての生き物の自然な姿です。

しかしどんなにこいねがっても、「散る桜、残る桜も　散る桜」（良寛さん）です。

昨日は他人（ひと）を見送った花が、明日は見送られる身となり、季節が終われば全ての花が散ってしまうのです。

私達人間もこの桜の花のように、今生きている全ての人が、次々とこの世を去っていくのです。

どんなに頑張って美しい花を咲かせても、結局は花も人も死んでしまうのです。

人生と目的

昔こういう話を聞いた事があります。

戦時中、捕えた捕虜に対し、肉体的にはともかく、何よりも精神的に強烈な打撃を与える役務（えきむ）というのがあったそうです。それは、丸々一日かけて大きな穴を掘らせるという労働を課すことです。

もう立つ事もできない程にクタクタに疲れさせて掘らせたその大きな穴を、その翌日、彼ら自身に埋めさせるのです。

そしてまた次の日にも休む暇なく穴を掘らせ、それをその翌日埋めさせるという事を繰り返しやらせるのです。

どれほど頑張って大きな穴を掘っても、その穴は何の意味も価値もなく、翌日は再び埋めさせられるという事を知った捕虜達は、一人二人と体を壊し、次々と死んでいったそうです。

これがもしも、同じ穴を掘らせられるのであったとしても、掘った穴が明日は何かの役に立つ、例えばそこに肥料を入れて耕し、苗を植えて大きく育てるとか、大きな灌漑用の池にするというような、自分のしている事が何かの役に立つという、喜びや明日に向かう希望がそこにあれば、全く同じ過酷な労働を課せられたとしても、結果はまた違うものになっていた筈です。

この捕虜に対するやり方は、人間とは如何に精神的な生き物であるかという事を熟知した上でなされた、本当に残酷な行為であったかという事が分ります。

人間は、ただ肉体が生きていさえすれば、それで良いという生き物ではありません。

自分のする事、即ち生きている事に何の意味も価値も見出せないとしたら、それは決して抜け出すことの出来ない無間地獄（むげんじごく）に生かされる事と何ら変わりありません。

では人間として生まれてきて、四苦八苦しながらどれほど前向きに頑張って生きたとしても、結局は死んでいくしかない私達のこの人生に、一体ど

のような意味があり、価値があるというのでしょうか。

明治三六年、当時高校生であった十六歳の青年藤村操が、「人生、不可解」と言い残して、華厳の滝に投身自殺を図り、大きな話題になったことがありました。

この青年が行きづまった考え方が、人生には元々初めから何の意味もないのではないかという事だったように思います。

どうせ最後は死んでいくしかない人生なら、何もわざわざ苦労しながら生きる必要はなく、死にたくなった時に死んでも一向に構わないではないかという論理です。

では彼が、人生不可解と言ったその「人生」とは、何かと言うことです。人生とは肉体を付けて生きているある一定の期間ということができます。それではそもそも、その肉体とは何なのでしょうか。

肉体の奥にあるもの

これも随分前に聞いた話です。

未開のある国からはるばる日本に視察にやって来た人がいました。生活習慣も食べる物も、何もかもが全然違います。見るもの聞くもの全てが珍しく、彼にとっては毎日が驚きの連続だったそうです。

さて数日後、自分の国に帰るに当たって、何かひとつお土産をあげようと言われた彼は即座に、「あの蛇口がほしい」と言ったそうです。

「あれさえあれば、遠い所まで水を汲みに行かなくてもすむ。これからはいつでも好きな時に、ほしいだけの水が飲めるし、洗濯も出来れば、飼っている家畜達にも、好きなだけの水を飲ませてやる事が出来る。だからあの蛇口がほしい」。

大真面目な彼を前にして、係官がどんな顔をしたかは想像に任せますが、私達は決して彼の事を笑ってはならないと思います。

当然のことながら、壁に取り付けられた蛇口の奥には、まず最初に、水道をどこにどういう形で引くかという基本的な計画があり、その計画に基づいて設置された、様々な装置や設備があるのです。河川などから集められた水は、浄化の為に幾つもの装置を順番に通され、水道管に引き込まれていきます。

そして必要に応じ次第に細い水道管につなげられ、最後にようやく、その水は壁に取り付けられた蛇口のところに来るわけです。

当たり前な事ですが、蛇口さえあれば、どこでもその場で水が出るわけではありません。蛇口の奥には、表からは見ることが出来ない膨大な計画やシステムがあるのです。

私達人間の肉体や心、そして魂の奥にも、目には見えない人智を超えた偉大な大生命の力が、生き生きとみなぎっております。

そしてその大生命の摂理に基づき、命は変圧器を通すように徐々に弱められながら、各自一人ひとりの中に注ぎ込まれてきているのです。

そして例えば、蛇口に不具合が起これば水が流れてこなくなるように、肉体が使い物にならなくなれば、命は肉体には流れてこなくなります。

それが私達の「肉体の死」の状態です。

大切な事は、目に見えるこの蛇口が、水道設備の一番最後の場所であるように、私達の肉体というものも、私本体の最後の部分にすぎないという事です。

本当の私とは、目に見える肉体を表とすればその奥に、目に見えない心や魂、そしてその奥にあるもっと細かな波動のものへと繋がっている大きな、大きな存在なのです。しかし氷山の一角にすぎない肉体をみて、殆どの人が、この肉体が自分そのものであり、自分の全てであると思いこんでいるようです。

命の流れと魂の浄化

水の流れを良くするためには、常に水道設備の整備や点検修理などが必要です。

私達も命の流れを良くする為には、肉体や心を正しく保つように心がけ、汚れを取り除く事が必要です。

そのためには正しい食事や適当な運動、睡眠なども必要ですが、何よりも一番大切な事は、本来の自分とはどういうものであるかという事を知ることです。まず己を知るということです。

そして、水道設備を作るに当たっては先ず基本的な計画があるように、私達一人ひとりの人生にも、永遠なる時間の、永遠なる命の流れの中での、遠大な命の計画が秘められているという事を知らねばなりません。

生きたり死んだりの繰り返しの中で、魂は着実に一歩一歩浄化され、私達は素晴らしい明日に向けて進んでいるのです。

この永遠の自分の存在を知らなければ、あの滝に飛び込んだ学生のよう

に、人生不可解などという言葉を遺して、人生の苦しみから目をそらし(彼の自殺の原因は失恋であったという説が残されています)、自ら死を選ぶような事になるのです。

苦楽は一如であり、苦しみだけの人生も無ければ、楽しみだけの人生というのもありません。

苦しみにも楽しみにも、夫々にちゃんとした深い意味があるのです。

死なない自分

肉体の死はあっても、命の死はありません。

本能的に私達は、生き通しの自分というものを知っているのです。そしてまた私達は誰でも、「人間は、肉体の経験を通して魂の浄化向上を行っている」という事をも、意識の深いところで知っているのです。

肉体という道具がある間は、向上浄化しやすいという事を深く知っているからこそ、私達は死を恐れるのだと思います。

犬や猫が、将来の自分の死を想像して恐怖するとか、将来を悲観して自殺を図るなどという話は、聞いたことがありません。

それは彼らには、毎日の生活を通して魂の浄化向上を図るなどという事がないからだと思います。人間だけが肉体を道具として、毎日の生活の中で魂の修行をする生き物です。

深山（みやま）の桜という話があります。

人ひとり通らない深い山の桜は、誰に褒められる事もなく、また愛（め）でられる事もなく、それでも季節がくれば、力一杯美しい花を咲かせます。

花はすぐに散ってしまいますが、厳しい寒さの冬や花咲く春、爽やかな葉桜などの季節などを、幾度も幾度も経験する事によって、幹は太く逞しく育っていくのです。

私達の人生も、毎日の生活の中で様々な喜びや苦しみがありますが、体験すること全ては、散り行く花びらのようなものです。散った花びらや葉っぱは肥やしとなって、桜の幹を更に大きく立派に育てて行くように、私達が体験する一つひとつの出来事は確実に私達を育て、魂の浄化の糧となっているのです。

誰の目に留まることもなく、誰からも認められなくても、生きている間は一人残らず、私達はどんどん浄化されているのです。

浄化のために生き続けていく私達にとって、忘れてならない一番大切なことは、平井先生が教えて下さった「もとはこちら」という自然の摂理です。

どんな事が身の回りに起こってきても、「自分が体験した事の原因は、全て自分の中にある」ということです。

ですから先に揚げたあの捕虜の例でも、本人の意識できない世界の中では、その過酷な労働さえも、とても大きな意味があったはずです。ですからもしも本人がその深い意味を、生き通しの自分の中に見出す事が出来たとすれば、その人は大覚を得た人となるでしょう。

またあの学生も、自分の人生に秘められた命の遠大な計画に気付いていたならば、あわてて滝に飛び込むこともなく、将来に希望を抱いて明るく生きていったはずです。

肉体を持って生きる事の意味を知り、体験した事を他人のせいにする事なく、一日一日、謙虚さと感謝心を忘れずに、誠意をもって前向きに生きる人は、浄化がどんどん進みます。

明るい明日へとまっしぐらに進む事ができるのです。

死を恐れるという事は、裏を返せば、自分の魂がまだまだこの肉体を使って、この世での修行をしたいと望んでいるからではないでしょうか。

ですからこの肉体を十分に使い切り、この世での修行を終えた人は死を恐れることなく、満足して心安らかに死を迎える事ができるようになる筈です。

私達には、永遠の命の中で、今日よりも素晴らしい明日の人生が用意されているのです。無為（むい）な人生などは、どこにもありません。

全ては明日への希望につながっているのです。

編集発行人　もとはこちら会　資料編集部　北原友也
専用ＨＰ　http://www.motoha-kochira.com
mail:　data3@motoha-kochira.com